

神楽阪の半襟

水野 仙子

貧というもののほど二人の心を荒くするものはなかった。

「今日はお精進かい？」

とても、箸を取りかけながら夫が言おうものなら、お里はそれが十分不足を意味してるのではないと知りながら、

「だって今月の末が怖いじゃありませんか。」

と、たちまち怖い顔になって声を荒だてる。これだけ経済をなしたという消極的な満足のかたわら、夫に対してすまないような気の毒のような、自分にしても張り合いのない食卓なので、あたかも急所をつつかれたようにおなかの虫が首を曲げるのである。

「なにもそんなに声をどがらせなくていいじゃないか。」

と、夫の顔も引きしまってくる。そしてまたれ合っていた愛情が、てんでに自分の持ち場にかえって固くなってしまふようなことがままたあった。

貧というもののほどまた二人の間を親密にするものはなかった。あたかもそれが愛情に注ぐ油でもあるかのように。

「寒くなったねえ。もう電車に乗ってもコートを着てない人は一人もないねえ。さっちゃんも

どうかしてぜひ一つ作らなけりゃあ……。」

と、夫は改札口を出るといきなり冷たく咽喉を刺す空気を恐れるように、外套の袖で鼻のあたりを押さえながら言った。

「寒いだろう？」

「いいえ。」

と、お里は齒の根の震えそうなのを嘔みしめて、ひじを張って両袖を胸の前にかき合わせながら、

「コートなんか無くて過ごせるわ。あれはそんなに暖かい足しにはならないんだから。」

と、自分で自分に殊勝な心がけを言い含めるように言った。そして我ながらしおらしい気分をめぐるように、涙ぐましくなったのを紛らわすように言葉を重ねて、

「あなたは？ 寒かあない？」

と、病後の夫の血の気の少ない顔を下からのぞきこんだ。

それはある日、十一月も僅かに一、二日を後に残している頃であった。どうかこうかその月費やしたものを償うだけの金が手に入ると、二人は急に開放されたような心持ちになって、薬代としたものだけを蠶口の小口に分けて、日の影のない曇った寒い日なのにもかかわらず、三時という半端な時間なのにも躊躇しないで、郊外の家から久しぶりで甲武線の電車に乗ったのであった。山が欠けたまま四五日我慢して履いていた夫の駒下駄を買うのが、楽しい第一の目的であった。

牛込見附の桜の枯れ枝の隙に光るお濠の水の冷たそうよどみに、鴨かなにかが静かにじつとつぐまって浮かんでいる。冬の日はまだ夕暮れに夕暮れの用意をしているらしかった。

2 【お精進】野菜だけを食べて、肉や魚を食べないこと。

6 【経済】お金のやりくり。

11 【寒かあない】寒くはない、の口語的表現。

13 【どうかこうか】どうかこうかにか。

15 【蠶口】口金がついて、上のほうが大きく開く財布。

16 【甲武線】かつて東京西部に敷かれていた鉄道路線。

19 【牛込見附】東京都千代田区にあった江戸城の見張り所、牛込門の跡。

「僕はマントも着ているし、ちっとも寒くないがね、さっちゃんが寒いだろうと思ってさ。電車の中で向こう側から見ていたら、なんだか寒そうな土気色をしていたよ。この頃少し痩せたようだね。」

「そつでもないでしよう。」

と、お里は笑いながら自分の頬をなでてみたが、新しく涙が湧き出ようとしているのを覚えた。お里はいつも優しく言われると泣きたくなるのである。そしてつくづくこの四、五か月のことが振り返られる。いつだって今月こそどうしようと思わない月はなかった。都合によって会社のほうをよしてしまっただけの病気だったので、一日だって心の落ちついているときはなかった。つらい思いをして田舎の里へ無心をしたり、夫の義兄の世話になったりして、ようよう難関だけは通り越してきたが、まだああしてぶらぶらとほんとの体になれないでいる……と思うと、夫がいとしいやら、自分がいじらしいやら、寂しい思いに閉じられて過ごしたその頃が、新しくひらめいて頭を横切るのであった。こうして優しく夫にいたわられると、感心な節婦の話でもあるかのように自分が眺められる。心配と労力に報いられるものの少ない失望も忘れ、月々の薬代を見積もって、そつと着物の値段と比べてみたりしたきもししい心の跡形もなくなって、ただ夫の上にお里の心の全てははたらきだした。

「なんだか年の暮れらしくなりましたね。」

広い世界にたった二人が頼り頼られる体であるような、寂しい、そのくせ心強い今の思いを、胸の中いっぱい溜めて、それを少しづつ味わうのを楽しむもののように、お里はぼつりぼつりと口をききながら歩いた。

久しく家に近い牧場の牛の声や、豆腐屋の喇叭の音などにばかり慣れていた耳に、混雑して入

る町の物音が、なんとなく心をせき立たせた。歳暮にまもない神楽坂の空気は、店々の品飾りの上に漂って、新干し海苔のつやつやしい色が乾物屋の店先を新しくしていた。

「下駄と、足袋と、それからあなたはインキを買って言ってたわね。」

と、お里は爪先あがり坂を上りながら数えだしていたが、ふと髷屋の店が目につくと、

「あ、そうそう、私すき毛を一つ買おう。」

と、思い出したように小走りにその店に寄っていった。

髷屋の主人が背伸びをして瓦斯にマッチを擦ると、急に青白い光がぱつとして薄暗い店先を照らした。気がつくと、坂下坂上の全体に灯が入っていた。

「下駄はどこで買いましたよ。」

と、そこから出てきたお里は、夫と並んで歩きだしながら言った。

「さあ。」

坂を上りきって広々とした往還に出ると、二人は少し足を緩めて、右と左のさまざまな店々を見回しながら歩いた。お里が殊に気をつけたのは、洋物店の硝子の中に飾られた刺繍入りのシヨールの中に、自分たちの力に添った衾のものを見いだすことであった。呉服屋の飾り窓に自分の年とかっこうした品物が目につくと、なんとなく寄ってみて正札をのぞきこんだ。

「まあいい柄!」

お里はふと立ち止まって、とある半襟店の小さなシヨールウィンドーを眺めていたが、同じく足を止めた夫の傍らを、つと離れてのぞきに行った。

「ちょっと、ちょっと。」

と、やがて手もちぶさたに立っている夫を呼んで、にこにこしながら、

9 【田舎の里へ無心】実家に金品をねだること。

12 【節婦】正しい行いをする妻。

1 【歳暮】年の暮れ。年末。

1 【神楽坂】東京都新宿区にある地名。牛込門から北西に上がる坂道。神楽坂。

3 【足袋】和服を着るときに足に履く、爪先が二つに分かれた袋型の衣料品。

4 【髷】日本髪を結うとき、地毛を補うためにつける毛。あとの「すき毛」は髷の一種。

15 【かっこうした】つり合っている。

15 【正札】本来の値段を書いた商品につけた札。

17 【半襟】和服を着るときに着物の下につける襟。

「ね、いい柄がらでしょう？ 四十八銭せんだって……ほとどの縮緬ちりめんじゃないのよ。まがい……でもいい柄がらでしょう？」

と、傍かたわらに立っている人にはばかるように、後のほうは声を低めた。

「うん……それよりもあっちのがいいよ。」

「だって……。」

と、お里は夫の趣味しゅみが自分と一致いっちしないのを発見したような不平を感じながら、

「どれ？ あれ？ まあいやあだあんなの、あんな平凡へいぼんなのよりこのほうが粹いきでいいわ、私わたしこんなのが好きよ。」

「ね。」

と、やがていかにも心をひかれるようにひたりと硝子ガラスに顔をつけて、

「買かおうかしら？」

と、同意を求めるように夫の顔を見た。

「あるじゃないか一つ、ちょうどそんなのが……。」

「だって……。」

お里はちぶりと油に水をさされたような気がした。黒地に赤糸あでの麻あまの葉を総模様にしたその半襟えりをかけた自分の白い襟元えりもとと、着物の配合とがたちまちにして消えた。

「どうせ買うならこっちのほうが……。」

「ああよしませうね。」

こう言ってお里ははじめられたように、つとそこを離はなれた。そのときちらと夫がいいという柄がらの正札しょうふだをにらんだ。二円にえんながしの値がついていた。

「でも入るなら買ったらいいいじゃないか。」

あまりに反発的な態度だったので、夫は居残いざのこって声をかけた。

「いいのよ。」

と、お里はずんずん歩きだした。

「おい！」

「……。」

「おいおい！」

「いいのよ。入らないのよ。」

と、お里は夫を待ち合わせて、

「間に合うの。私あんまり値が安かったものだからちょっと迷ったの。考えてみりゃ、あんなもの買うどこの騒さわぎじゃなかったのよ。」

お里は自分の殊勝しゅしょうな心から考え直したのであることを夫にも思わせようと優しく言やったが、顔を見ようことはできなかった。あてもなく前の方ばかりを見つめて歩いてるうちに、はつきりしていた灯ひがいつかまぶたにうるんでいた。

あんなけちな安物一つ思いのままに買うことができないのだと思うと、何やらうらめしいような気がしてならない。それに夫が、自分が安物で間に合わせようとしたことを認めてくれなかった不平もある。二円も出るものを、私はなんで今の場合買かおうなんて言いおう！

「あの家に入いってみませう。」

と、お里はずんずん夫の先に立たって、毘沙門前びしゃもんの下駄屋げだに入いっていった。

あれこれと桐きりの柁まさのよりこのみをしなから、お里はいつものように、あれがいのこれが悪い

1 【銭】通貨の単位。百銭で一円。

1 【まがい】偽物。

15 【麻の葉】六角形の幾何学模様。

16 【配合】組み合わせ。コーディネート。

17 【なんて今の場合買おうなんて言おう】なぜこの状況で買おうなどと言うだろうか、言うはずがないではないか。

19 【毘沙門】「神楽坂毘沙門天」の通称で知られる日蓮宗の寺院、善國寺。

20 【柁】木材の木目。

のと厳しい干渉をしなかった。

「買ったまえ!」

と、むぞうきに、大様にそう言ってもらいたかった! そして懐に手を入れかけたときに、主婦らしい考えを起こして、無駄なことをと、きれいにあそこを去ってきたかった!……

「あなた、インキを買うとか言ってるらしたっけ、私ここで待ってますから行ってらっしゃいな。」と、お里はやがて台と鼻緒をより分けて亭主の手に渡すと、夫に向かってそう言った。

「うん。」

外套の袖をさやさやいわせながら夫は出ていった。お里は腰掛けを低い框に引き寄せて、火の気の薄い火鉢に手をかざしながら、亭主の手もとに見入っていると、夫はまもなく帰ってきた。そのまま入ってくるのかと思うと、

「堅くないように立ててもらってね。」

と言いついて、またつかつかと坂下の方に向かって歩いていった。

「どこに行ったんだろう?」

お里はげんそうに目をその後ろ姿にやった。

「もしや?……」

と思ったときは、なんとなくどきりとした。

「そうかもしれない、あの人のことだもの。」

と考えたときは、うれしさに胸が早鐘のように鼓動を打っていた。

お里は夫が黙って、そっとあの半襟を買いにいったのだと思ったのである。そう信じてしまうと、うれしいような、ありがたいような、先刻の不平だの、味気なさだのは泡のように消えてし

6 【亭主】下駄屋の主人を指している。

まって、そうまでして自分をいたわってくれる夫の心持が気の毒にもなってくる。

「本当にいらなかったんだのに。」

と、しんから気の毒そうに、そのくせうれしそうにつぶやく胸を抱えて、

「鼻緒をあんまり詰めないでくださいな。」

と、お里は亭主に言った。

二人の間に溶けて流れるような薄甘い情緒が、この世の限りな幸福をもたらして、感激の涙が走るようにまぶたを突いて出ようとした。お里は慌ててそれを鼻のあたりに抑えるつらさを覚えながら、「君の下駄も買ったまえ。」と、今日の出がけに言った夫の言葉を思い出した。そしてうつむいて後ろの減った下駄を眺めていたが、これで暮れまで間に合わせてみようと、なんの苦痛もなく心を決めて、それがせめてもの夫の優しい仕打ちに対する返礼のような気がした。

「まだかい?」

夫は忙しく戻ってきた。お里はなんとなく胸をどどろかせた。

「どこに行ってるらして?」

と、きこうとしてきかなかった。

「どうもお待ち遠さまでございます。」

と、亭主は腰を低めて、下駄の歯と歯を食い合わせると、小僧に包み紙をとらせて、手早く紐をねじった。

それを包むとて風呂敷を広げたとき、お里は夫が黙って外套の袖の下から半襟を投げ出しはしないかしらと思った。

「もう買わない?」

18 【包むとて】包もうとして。

と、夫は歩きだしながら言った。

「さやさやとその袖裏が揺れたとき、「そら！」と手から手へ渡されるのではないかと思った。けれどもそれは冷たい空気を避けるために、鼻と口とを押さえたのであった。」

お里は少しく失望した。それでもどうやら夫の袂の中にあの半襟が潜んでいるような気がして、並んで歩くにも絶えずその辺りが気になった。

「なんだかいやに黙りこんでしまったね。」

と、こう言って夫に顔をのぞかれたとき、お里はただ薄笑いした。

何事も知らぬように行き過ぎようとする夫の袖の陰から、お里は恐る恐る先刻の半襟店の飾り窓に目をやった。そのときは反対の側の方に近く歩いていたのだけれど、視覚の記憶は明らかにその幾筋もの模様を識別した。

その一掛のところだけ空けられてあるか、それとも別なのが飾られてあるかと、まざまざそれが見えるような気がしていたのもあだとなって、黒地の麻の葉はもとのとおりとその濃い彩で道行く人の目をひいていた。

「おい！」

「え？」

「どうしたの？」

「何が？」

「どうかしたのかい、黙りこんでしまったじゃないか。」

「ふふ。」

と、お里は寂しく苦笑して、

4 【袂】和服の袖。ここでは下側の袋状になっている部分。

「あなたねえ、さっき下駄屋からこっちへ何しにいらしたの？」

「さっき？ インキの大瓶のがなかったから別な店に行ってみたのさ。」

「そつ。」

「どうして？」

「いいえ、なぜでもないの。」

こう言ってお里はまた黙りこんでしまった。いつのまにか日はすっかり暮れきっている。夜店を広げる商人が、あちこちの場所に見えた。

「おい、なにか食べて行かないのかい？ さっきそう言ってたじゃないか。」

「そうね。」

気のない返事をしたまま、お里はなお緩く歩き続けた。少しずつ吹いて過ぎる風に、顔の脂肪気をすっかり抜き取ってしまったような感じをしながら……。

【著者】水野仙子(みずのせんこ)

一八八八(明治二一)年—一九一九(大正八)年
小説家。福島県の生まれ。

【著書】「徒勞」「嘘をつく日」「犬の威厳」など